

古英語韻文作品 *Andreas* における関係代名詞の使用 —複合型関係代名詞の曖昧な用例の検討—¹

田尻小夏

1. はじめに

古英語期の関係代名詞には、現代英語と同様に複数の選択肢があり、言語使用者は、主に以下の3つの形式から選択することが可能であった。

(1) *þe*タイプ

ic þe mid wunige

| I you with stay

ond þe alyse of þyssum leoðubendum,

and you release | from these.DAT.PL bondage.DAT.PL

ond ealle þa menigo þe þe mid wuniað

and all the.ACC.F multitude.ACC.F | **that**.REL you with stay

*on nearonedum.*²

in cruel-bondage

「我は汝と共に在り、また汝および汝と共に難儀している総ての群衆をこれらの束縛から解き放してやろう。」³

(*And* 99b-102a)

(2) *se*タイプ

Syððan him geblendan bitere tosomne

afterwards him.DAT mixed | cruelly together

¹ 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものである。

² 以降、*Andreas* からの引用は、Brooks (1961)に基づく。太字およびグロスは左記を参考に筆者が付したもの。

³ 以降の日本語訳は、羽染 (1985)からの引用による。

dryas *þurh* *dwolcræft* *drync* *unheorne*,
 magicians.NOM.PL through sorcery.ACC.M | potion.ACC.M horrible
se *onwende* *gewit*, *wera* *ingeþanc*,
that.REL.NOM.M changed mind.ACC.N | man's.GEN.M intellect.ACC.M
heortan [on] *hreðre*;
 heart.ACC.F [in] breast.DAT.N

「その後彼のために魔法使いが魔術によって分別の力、人々の理性、胸の
 思いを迷わせる物凄い飲み物を邪な心で混合した。」

(And 33-36a)

(3) *seþe*タイプ

Gode *ealles þanc*,
 | to God.DAT.M all thanks.NOM.M
dryhtna *dryhtne*, *þæs ðe he dom* *gifeð*
 of lords.GEN.PL to the Lord.DAT.M, | because he glory.ACC.M grants
gumena *gehwylcum*, ***para þe*** *geoce* *to him*
 men.GEN.PL to every, | **that.REL.GEN.PL** help.DAT.F to him
seceð mid snytrum;
 seeks with wisdom.DAT.PL

「懸命にも彼に庇護を求める人々のすべてに栄光を与えられるがゆえに、王
 の王、神に感謝あれ！」

(And 1150b-1153a)

用例(1)は、不変化詞の *þe* を用いるタイプ (以下、「*þe* タイプ」)、用例(2)は性・数・格に応じて曲用する指示詞 *se* を用いるタイプ (以下、「*se* タイプ」)、用例(3)は両者を合わせた複合タイプ (以下、「*seþe* タイプ」)である。用例(2)では、先行詞 *drync unheorne* ‘horrible drink’ (男性・単数・対格) に対して関係代名詞 *se* (男性・単数・主格)を使用しており、性・数が一致している。ただし、格は関係詞節が要求する主格となっている。用例(3)に

については、先行詞 *gumena* ‘of men’ (複数・属格⁴)に対して関係代名詞 *para þe* (複数・属格)が使用されており、数・格共に一致する形を示している。このとき、関係代名詞の格は用例(2)とは異なり主節が要求する格をとっている。このように、関係代名詞の格は、主節に合わせる場合 (用例(3))と関係詞節に合わせる場合 (用例(2))があるが、ときにはどちらか判別できないこともある (Mitchell 1985: §2104, 2159)。

古英語期に見られる関係代名詞は、上記の 3 タイプに分類されることが多く、これらの使い分けについてはこれまでにさまざまな研究がなされてきた。最も包括的な研究の一つとして、Mitchell (1985)による古英語全体の統語的記述が挙げられる。この関係代名詞の関連項目は、古英語韻文作品を対象にした *adjective clause* についての 1963 年の記述に、さらに散文作品に関する記述等が加えられたものである。ここでは韻文と散文の違いや先行詞の種類などに着目しており、例えば、先行詞が指示詞や所有形容詞で修飾されているときは *þe* タイプが選ばれやすいことが指摘されている (§2253)。この他、関係代名詞の選択ファクターとなり得るさまざまな項目が検討されその分布が示されているが、結論としては、“they [the main tendencies in the poetry] remain tendencies and cannot be made into ‘rules’” (§2270)とあるように、古英語期の関係代名詞の選択には、現代英語のような文法規則はなく、言語使用者は比較的自由に表現を選ぶことができたと考えられる。Traugott (1992: 223, 227)でも同様に、関係代名詞の選択には絶対的な制約はなくあくまで傾向であることが指摘されている。

本研究では、このような古英語期の関係代名詞を名詞の提示の仕方の一つとして取り上げ、韻文作品のうち特に *Andreas* について調査を行う。元は口承であったと想定される韻文の形式でこの聖人の物語を語るとき、それぞれの名詞句がどのように聴衆に提示されたのかという視点から、本作品で観察される関係代名詞を記述し、以降の議論にて詳述する複合型関係代名詞の曖昧な用例について検討したい。

⁴ 先行詞 *gumena* が属格であるのは、これを修飾している *gehwylcum* ‘every’ の要求によるもの。このとき関係詞節は、*gumena gehwylcum* ‘every man’ではなく *gumena* のみにかかると考えられる。

1.1. 先行研究

古英語期の関係代名詞の使用は、例えば、“[t]he *sepe* relative is unusual in OE poetry, comprising as it does only some 2.5 per cent of all occurrences of the relative pronoun”⁵ (Mitchell 1985: §2173)とあるように、散文と韻文の間で異なる傾向がみられる。また近年では、Mitchell (1985)の記述を基点に地域または個別の作品に焦点を当てた研究が進められており、関係代名詞の使用傾向は地域や作品ごとに差があることがわかっている (Troup 1992, 2010; Sundquist 2002; Suárez-Gómez 2009; Sánchez Argüelles 2021)。

特に Sundquist (2002) では、古英語韻文作品である *Beowulf*、*Cynewulf* 作品 (*Elene*、*Christ II* および *Juliana*)、*Andreas*⁶ (1-500 行)、*the Battle of Maldon* と散文作品である *Homilies of Ælfric* を対象に関係代名詞の分布を比較し、各関係代名詞がそれぞれの作品において異なる比率で使用されていることを明らかにしている。特に本研究と関わるデータを抜粋すると、*Beowulf* における各関係代名詞の発生比率が、*pe* タイプは 39%、*se* タイプは 21%、*sepe* タイプは 40%であるのに対して、*Cynewulf* 作品では、*pe* タイプが 57%、*se* タイプが 22%、*sepe* タイプが 22%、*Andreas* (1-500 行)では、*pe* タイプが 71%、*se* タイプが 14%、*sepe* タイプが 14%を示している。当該研究では特に、*Beowulf* における *sepe* タイプの頻度の高さが指摘されている (249-250)が、*Andreas* のデータに着目すると、異なる比率ではあるものの、3 つのタイプの関係代名詞の中で *pe* タイプの使用が最も多く、他 2 つのタイプの使用が拮抗しているという点で *Andreas* における関係代名詞の使用が他の韻文作品に見られる傾向から大きく逸脱するものではないことがわかる。

また *Beowulf* における関係代名詞を調査した Troup (1992, 2010)にお

⁵ *sepe* relative は Mitchell による分類で、本研究における分類の *sepe* タイプのうち *se* が adjective clause の要求する格と一致するタイプのものである (1985: §2172)。

⁶ Sundquist (2002)で用いられている *Andreas* のデータは Troup (1992)からの引用。

いても、その比較対象として *Andreas* が採用されている。関係代名詞の制限/非制限用法の区別に着目したこの調査では、韻文と散文では制限/非制限用法の発生比率が異なることを示した。また、韻文作品全体を調査した Mitchell (1985) の記述に反して、*Beowulf* (2631-3182 行) と *Andreas* (1-509 行) では関係代名詞を非制限用法で使用する人が多いことを示している (2010: 75-79)。加えて、Mitchell が制限用法では *pe* タイプ、非制限用法では *se* タイプの使用が一般的だとする (1985: §2277) 一方で、Troup の調査結果は上記 2 作品においては *se* タイプのみならず *pe* タイプも高い割合で非制限用法に使用されていることを指摘している。

しかし、上記先行研究のいずれも *Andreas* の一部分のみを扱った調査結果であることに注意する必要がある。井田 (1993a) では、*Andreas* の全行を対象に各関係代名詞の分布を調査した結果、全 63 例のうち、*pe* タイプが 29 例 (46%)、*se* タイプが 23 例 (37%)、*sepe* タイプが 11 例 (17%) 観察された。また、*pe* タイプのほぼ全用例が先行詞に指示 (決定) 機能のある語がきていること (70-71)、および *sepe* タイプの用例のすべてが関係詞節内で主格として働くこと (75) が指摘されている。Sundquist (2002) や Troup (1992, 2010) が示した結果と比較して *se* タイプの比率が上がっていることから、関係代名詞の使用を正確に把握するためには、作品全体を対象に全数調査をする必要があることがわかる。

1.2. 主節に先行詞がない用例について

また下記のような形式の関係代名詞は、先行研究でもその分類について議論されており注意を要する。

(4) *þær bið symle gearu*

| there is always prepared

freod unhwilen, þam þe hie findan cann.

love.NOM.F eternal, | the one who.REL.DAT.M it.ACC.F find can

「久遠の愛はそれを訪ねうる者に常に用意されてある。」

(*And* 1153b-1154)

用例(4)は主節に明示的な先行詞がないことが特徴である。この関係代名詞 *pam pe* は一見 *sepe* タイプに分類されるように思われるが、指示詞 *se* を先行詞に取る *pe* タイプと解釈することもできる。その場合、用例(4)は主節の要求する格をとる指示詞 *pam* (男性・単数・与格)を先行詞とする *pe* タイプの関係代名詞といえる。

Mitchell (1963)では用例(4)のような表現を *sepe* タイプの一種として扱っていたが、その後 1985 年には、“[a] demonstrative often serves as the only possible antecedent to *pe* functioning alone as a relative pronoun” (§2153)とあるように、*pe* タイプに分類する考えを示している。一方で、Mitchell (1985)における関係代名詞の分布の数値は *sepe* タイプの一種としてカウントしたときのデータがそのまま使用されている。その後 Troup (1992)では Mitchell (1985)の新たな分類が採用され、続く近年の関係代名詞の調査の多くが上記のような用例を *pe* タイプとして分類している (e.g. 井田 1993a, 1993b; Sundquist 2002; Sánchez Argüelles 2021)。

この分類に関しては、Sundquist が “[t]his revised classification has a significant effect on the distribution of different types, since it yields a higher frequency of Type A [*pe* タイプ] and a lower frequency of Type C [*sepe* タイプ]” (2002: 248)と述べているように、新しい分類を採用した調査によりこれまでとは異なる傾向が見えてくる可能性がある。

本研究では、このような主節に先行詞になり得るものがなく、かつ *se* が主節の要求する格を示す関係代名詞を (*se*)*pe* タイプと定義する。分類としては *pe* タイプであり、(*se*)*pe* タイプはその下位区分と考えられるが、本調査においては統計上 4 タイプ目として扱うこととする。本研究は、新たな分類法を採用し、さらに (*se*)*pe* タイプとして独立した区分を設けることで、より詳細に関係代名詞の使用を記述することが期待できる。

1.3. *Sepe* タイプか (*se*)*pe* タイプか曖昧な用例

Troup (2010)に以下のような記述がある。

If most of the *se* elements in the compounds [*sepe* タイプ] in *Beowulf*, as well as those in Mitchell’s corpus, receive their case assignments from their

antecedents—rather than from the relative clauses—then these *se* elements seem much more likely to be emphatic appositions of their antecedents than parts of relative complexes. (15)

上記は、*Beowulf* で使用されている *sepe* タイプの関係代名詞について、これを構成する *se* が先行詞と同じ格を示す場合、関係代名詞の構成要素というよりもむしろ先行詞の同格表現にみえることを指摘している。つまり、主節に明示的な先行詞があるときでも関係代名詞の発生環境によっては(*se*)*pe* タイプと解釈できる可能性があるということである。

これについて、本研究が扱う *Andreas* にも検討すべき用例が存在する。以下に示すのは、*sepe* タイプと(*se*)*pe* タイプ、どちらにも解釈し得る用例である。

(5) *wædu swæðorodon,*

| waves.NOM.PL subsided

seoðþan hie ongeton þæt ðe God hæfde

when they.NOM understood | that you.ACC God.NOM.M had

wære bewunde[n], se ðe wuldres blæd

covenant.DAT.F encompassed, | who. REL.NOM.M glory.GEN.N glory.ACC.M

gestaðolade strangum mihtum.

created | strong might.DAT.PL

「光荣ある祝福を強い力をもって造られた神が契約に従って汝を囲んでいられることを認知した時波は静まったのだ。」

(*And* 533b-536)

用例(5)では、先行詞 *God* ‘God’ (男性・単数・主格)に対して、性・数・格が一致する関係代名詞 *se ðe* (男性・単数・主格)が使用されている。本調査の基準では、このような用例は *sepe* タイプに分類される。しかし、*God* という唯一無二の指示対象を先行詞に持つこの用例において、関係代名詞に先行詞を限定する働きはない。加えて、関係代名詞の一部である *se* は主節の要求する格を示している。そうであれば、*se* は主節の文要素とし

て機能しているとも解釈でき、この関係代名詞はGodの言い換え表現と考えることができる。すると用例(5)は、‘the one who created glory...’というような解釈となり、(se)peタイプに分類することが可能に思える。

本研究では、*Andreas* においてもこのような主節に先行詞となり得る語がある *sepe* タイプを(se)pe タイプと解釈することが可能かどうか、調査結果をもとに検討したい。

以下、本論では、第 2 節で使用するデータおよび調査方法について述べ、続く第 3 節では結果をまとめ第 4 節にて調査結果をふまえて用例(5)のような曖昧な複合型関係代名詞の分類について検討する。

2. データと方法

2.1. 使用データ

はじめに、本調査で使用するデータについて概略を述べる。調査対象の *Andreas* は、唯一の写本として the Vercelli Book が現存しており、これは 10 世紀後半頃の作成と推定されている。オリジナルの作成年代と作者については現在も議論されているが、年代については、語彙や韻律の観点から類似が指摘されている *Beowulf* や *Cynewulf* 作品よりも後の成立だと考えられている (Brooks 1961: xxii)。言語については、基本的に後期 West-Saxon 方言が使用されているが、初期 West-Saxon 方言や他の地域変種の特徴もいくつか観察される (Id. xxxi-xxxix; North and Bintley 2019: 9)。これらを総合して、本作品はおおよそ 9 世紀半ばの成立と推定されている。本研究では、上記写本に基づく Brooks (1961)版を使用する。

2.2. 調査方法

本研究の調査においては、関係代名詞を先行研究に依拠した 3 タイプに分類した上で、*pe*タイプの下位区分である(se)peタイプを独立した項目として扱う。また、本調査では以下のような用例の他、いくつかの表現を調査対象から除外している。

- (6) *mycel is to secganne,*
| much is to say

langsum leornung, þæt he in life adreag,
 long-lasting study.NOM.F, | **what. REL.ACC.N** he.NOM in life.DAT.N endured
eall æfter orde;
 all.ACC.N after beginning.DAT.M

「彼がその生涯で経験したことを初めから残らず話すことは大変だし、時間もかかることだ。」

(*And* 1481b-1483a)

用例(6)は *free relative* として、*þæt* に先行詞と関係代名詞の両方が含まれると解釈される。本研究では先行詞と関係代名詞の選択の關係に着目するため、このような用例は除外する。また、*þæs þe* ‘because’ のような固定化した表現についても同様に除外する。このような表現は、元は關係詞の構造であるが慣習的に一つのフレーズとして使用されており、關係代名詞のタイプに選択の余地はないと考えられるためである。加えて關係副詞については本研究では扱わないものとする。

2.3. 調査項目

本論における調査では先行詞との關係に焦点を当てるため、調査項目は、①先行詞の有生性、②先行詞の識別可能性、③先行詞と關係代名詞の距離の3点とする。

①では、先行詞を生物/無生物で分類する。このとき、指示詞 *se* が先行詞である(*se*)*þe* タイプについては、*se* 単体を生物か無生物かに分類することができないため、他とは分けて結果を示すこととする。*(se)þe* タイプは、後続の關係詞節によって修飾されることで生物か無生物かどちらを表現しているかを判断する。

②では、先行詞が聴衆や読者にとって識別可能か否かによって分類する。識別可能性とは、“non-discrete” (Breban 2012: 272)なものではあるが、本調査では便宜的に先行詞の種類または修飾語に応じて4段階に区分する。その際、以下の Mitchell による分類法を援用する。

- I. those which are qualified by a demonstrative (*se*, *seo*, *þæt* or *þes*,

- peos, pis*), or by a possessive adjective;
- II. those which are qualified by one of the following used as an adjective: *an, nan, ænig, nænig, manig, eall, oðer, gehwilc, or æghwilc*;
- III. those which do not fall into either of the above groups.

(Mitchell 1963: 311)

上記の分類では固有名詞、人称代名詞、指示代名詞⁷が除外されている。本調査では、これらを最も識別可能性の高い項目として追加し、I から IV の方へと識別可能性が下がるように以下の区分を設定する。

- I. 固有名詞、人称代名詞、指示代名詞
- II. 指示詞または所有の形容詞によって修飾される場合
- III. 数量詞によって修飾される場合
- IV. その他

このとき、*(se)pe* タイプについては除外してカウントするものとする。

最後に③では、先行詞と関係代名詞の距離について語数を計測する。先行詞と関係代名詞が隣接している場合を 0 としてそれぞれの間にある語数を測り、関係代名詞のタイプごとの平均および最高値と最低値を除いた調整平均を求める。

3. 結果

まず全体の分布について、*Andreas* において関係代名詞は 55 例観察された。そのうち 10 例 (18.2%) が *pe* タイプ、18 例 (32.7%) が *(se)pe* タイプ、16 例 (29.1%) が *se* タイプ、そして 11 例 (20.0%) が *sepe* タイプであった。最も頻度が高いのは *(se)pe* タイプを含めた *pe* タイプで、これらが約半数を占めているが、*(se)pe* タイプを独立した項目として考えると *se* タイ

⁷ ここでいう指示代名詞は、前方照応的に指示対象が特定できるもののみを指し、関係詞節によって指示対象を限定する *(se)pe* タイプの先行詞である指示詞 *se* は含まない。

プの使用頻度が比較的高いといえる。

以下、順に項目別の調査結果を確認していく。

3.1. 先行詞の有生性と関係代名詞の選択

本節では、先行詞の有生性が関係代名詞の選択に与える影響を検討する。以下に示すのは、先行詞を生物/無生物に分けて各関係代名詞の分布を調査した結果である。

表 1. *Andreas* における先行詞の有生性に着目した関係代名詞の分布

	<i>pe</i>	<i>se</i>	<i>sepe</i>	Total
生物	6	12	11	29
無生物	4	4	0	8

表 1 が示すとおり、先行詞が生物である場合、*se* タイプの使用が 12 例と最も多く、*sepe* タイプが 11 例、*pe* タイプが 6 例と続いている。一方、先行詞が無生物の場合には、*sepe* タイプの使用はなく、*pe* タイプと *se* タイプがそれぞれ 4 例ずつ観察された。

特筆すべきは、*sepe* タイプの使用が先行詞が生物の場合のみに限られている点である。*sepe* タイプが West-Saxon のみならず 10 世紀頃の Northumbrian においても先行詞がヒトの場合に使用されやすいことはすでに指摘されている (Sánchez Argüelles 2021) が、上記結果からこの傾向が *Andreas* のような韻文作品においても確認できるより一般的な傾向であることがわかる。同時に *Andreas* では、先行詞の有生性という観点において、古英語期の標準的な使用を示しているといえる。

また、表 1 からは除外した(*se*)*pe* タイプの使用についても確認したい。3 節冒頭で確認したとおり、(*se*)*pe* タイプは全体で 18 例確認できる。そのうち 16 例が生物 (特にヒト)を表す表現に使用されている。残りの 2 例はどちらも、用例(7)における「～したこと」というような行為を表現しているものである。

(7) *No on gewitte blon*⁸,

Never in mind.DAT ceased from

acol for þy egesan, þæs þe he ær ongann,

terrified for the. INST fear.INST | the thing.GEN **which**.REL he before began

「恐怖で震えてはいたが、先に始めたことを心中で変えたりはしなかった」

(*And* 1265b-1266)

上記のような用例は見られるものの⁹、*Andreas* において使用されている関係代名詞のうち最大の割合を占めるこの(*se*)*þe* タイプは、基本的には生物を表現するために使用されているといえる。加えて、16 例のうち 4 例が神を、1 例が主人公である聖人 *Andreas* を指す表現であることにも注目したい。本作品では、神と *Andreas* の対話を中心に物語が進み、そのため両者については繰り返し言及される。そのうちの数回をこの(*se*)*þe* タイプの表現が担っていることになる。

他の形式については、生物を先行詞にとる関係代名詞 29 例中 9 例が神、4 例が *Andreas* を表すものであった。その内訳は、神を表す表現のうち *þe* タイプが 1 例、*se* タイプが 4 例、*seþe* タイプが 4 例、そして *Andreas* を表す表現のうち *þe* タイプが 1 例、*se* タイプが 3 例で、*seþe* タイプは見られなかった。

以上をまとめると、生物が先行詞である場合、*se* タイプの使用がやや優勢であり、この傾向は神や *Andreas* を表現する際にこのタイプが選ばれやすいことと関わりがあるように思われる。また、本作品においては *seþe* タイプが無生物先行詞に対しては使用されておらず、先行研究が指

⁸ 動詞 *blon* < *blinnan* は目的語に属格をとる (Bosworth 2014b; Brooks 1961: 134)。

⁹ (*se*)*þe* タイプについては、*seþe* タイプの *free relative* と解釈することもでき、今後検討が必要な表現である。特に上述の無生物を表す 2 例は、*free relative* ‘what’ で解釈するのが適切かもしれない。今回除外した *free relative* (*And* 73, 346, 1295, 1445, 1482) はすべて *se* タイプであり、主節中に先行詞となり得る語がないことに加え、*se* (変化形を含む) を関係詞以外で解釈することができず、関係代名詞に先行詞を含むと判断せざるを得ない用例であった。*(se)þe* タイプについては、*þe* を関係詞とし、*se* を先行詞として解釈することが可能であるため、本研究では *free relative* とみなさず計上している。

摘する *sepe* タイプがヒト先行詞と共起しやすいという傾向がより一般化されたといえる。

3.2. 識別可能性

次に、先行詞の識別可能性と関係代名詞の関係について検討する。以下の表は、2.3.節で述べたとおり先行詞の種類、修飾語に応じて 4 段階に分類したときの各関係代名詞の分布を示している。

表 2. *Andreas* における先行詞の識別可能性に着目した関係代名詞の分布¹⁰

	<i>pe</i>	<i>se</i>	<i>sepe</i>	Total
I. 固有名詞、人称代名詞、指示代名詞	1	4	3	8
II. 指示詞または所有の形容詞による修飾	6	1	1	8
III. 数量詞による修飾	1	1	5	7
IV. その他	2	9	2	13

表 2 は、先行詞が固有名詞、人称代名詞または指示代名詞であるとき、すなわち聴衆/読者が先行詞が提示された時点で指示対象を特定できる場合に、最も選ばれやすいのが *se* タイプであることを示している。次いで *sepe* タイプが 3 例あるがこれについては 4 節で検討したい。*pe* タイプは

¹⁰ 本項目では下記の用例を除外しているため *se* タイプの合計値が表 1 と異なる。

ðæt is Andreas, se me on flited

wordum wrætlicum for wera menigo.

「多くの人の前で驚くべき言葉もって俺と言い争う男こそアンデレだ。」

(*And* 1199-1200)

この用例の先行詞と考えられる指示詞 *ðæt* は、レベル I に分類されるような前方照応的に指示対象が特定できるものではないため除外している。ここでは *ðæt is ... se ...* ‘it is ... that ...’ の形で現代英語の強調構文のように使用されている。

わずか 1 例にとどまる。指示詞または所有の形容詞によって修飾された先行詞については、*pe* タイプが 6 例と最も頻度が高く、指示機能のある語との相関を指摘する井田 (1993a: 70-71) の記述とも一致している。数量詞による修飾の場合は *sepe* タイプが選ばれやすい。IV. その他、つまり先行詞を提示された時点では指示対象を特定することが困難な場合には *se* タイプが 9 例あり、最も選ばれやすい。

先行詞の識別可能性に着目する本調査では、識別可能性のレベル II に分類された用例についてさらに詳細を確認したい。下記の一覧は、指示詞または所有の形容詞によって修飾された先行詞 8 例を示したものである。

表 3. 指示詞または所有の形容詞によって修飾された先行詞の一覧

	行数	先行詞	識別可能性 (先行詞提示時点)
<i>pe</i>	101	<i>ealle þa menigo</i> ‘all the multitude’	×
	263	<i>se manna</i> ‘the man’	○ (Andreas)
	799	<i>se wealdend</i> ‘the Lord’	○ (God)
	945	<i>eal þæt mancynn</i> ‘all the mankind’	×
	1318	<i>wuldor þin</i> ‘your glory’	△
	1486	<i>eall þa earfetðo</i> ‘all the hardship’	○
<i>se</i>	1370	<i>secgas mine</i> ‘my warriors’	△
<i>sepe</i>	566	<i>þæt cynebearn</i> ‘the royal-child’	○ (God)

表 3 は、指示詞 *se*¹¹ が付く名詞句が、先行詞として提示された時点では

¹¹ 指示詞 *se* は後に現代英語の *the* や *that* へと発展するとされるが、古英語期の *se* はまだ現代英語の定冠詞 *the* と同等とはみなされていない。現代英語だと *the* を用いる場面で *se* が現れないケースがあり (Traugott 1992:172)、またその逆も観察される。しかし *Beowulf* における指示詞 *se* の使用を調査した Epstein (2011) では *se* 付き名詞句の 98.2% がなんらかの形で特定可能な指示対象を指すものであった (115) としており、多くの場合、指示詞 *se* は特定可能であることを示すと判断できると思われる。

必ずしも識別可能ではないことを示している。識別可能性が×となっている *And* 101 行および 945 行の用例は、現代英語と同様に関係詞節を用いた後置修飾によって指示対象が限定されて特定できるようになる。所有の形容詞を用いている△の 2 例 (*And* 1318 行、1370 行)は、先行詞が示された時点である程度まで対象を絞れるものの、関係詞節によってさらに限定されるか、追加情報が提示されるにとどまるかは判断が難しい。○の 4 例 (*And* 263 行、799 行、1486 行、566 行)については、それまでの文脈で既出であるものや、物語の要となる神や *Andreas* を指す用例であるため、先行詞が提示された時点で指示対象を推定することができる。このような緩やかな識別可能性を持つ先行詞に対して、*Andreas* では *pe* タイプが好まれることがうかがえる。

数量詞によって修飾される場合 (レベル III)については、関係代名詞の格標示に注目したい。例えば用例(3)の場合、関係代名詞は先行詞と同じ属格を示している。この項目で最も頻度の高い *sepe* タイプでは、全 5 例のうち 2 例が属格、3 例が与格を示している。井田 (1993a: 75)でも指摘されているように、*Andreas* における *sepe* タイプはすべて、関係詞節内では主格として機能する。つまり、上記 5 例の関係代名詞はすべて、主節の要求する格を示していることになる。格標示が可能、かつ関係代名詞であることが明示的である *sepe* タイプは、*Andreas* において数量詞との共起が好まれたようだ。

以上のとおり、*Andreas* における関係代名詞は、先行詞の性質に応じてそれぞれのタイプが選択されていることがうかがえる。指示対象が最も明確な場合と、特徴的な修飾語がつかず指示対象を特定できない場合には *se* タイプが、指示詞 *se* や所有を表す語によりゆるく指示対象が限定される場合には *pe* タイプが、数量詞付き先行詞の場合には *sepe* タイプが選択される傾向が示された。

3.3. 先行詞と関係代名詞の距離

最後に、先行詞が提示されてから関係詞節が示されるまでの距離との関係について検討する。下記の表は、先行詞と各関係代名詞の距離の平均をまとめたものである。

表 4. *Andreas* における先行詞と各関係代名詞の距離 (語数)

	平均	調整平均
<i>pe</i>	0.90	0.38
<i>(se)pe</i>	0.44	0.19
<i>se</i>	1.50	1.29
<i>sepe</i>	3.09	3.11

表 4 が示すとおり、*pe* タイプは平均すると先行詞と関係代名詞の距離が最も小さく、ほとんどの場合、先行詞と関係代名詞は隣接している。下位区分の*(se)pe* タイプでは、18 例のうち 2 例を除いて先行詞となる指示詞 *se* は関係詞 *pe* の直前に置かれている。これに続く *se* タイプが平均 1.50 語 (調整後 1.29 語)を示し、平均 3.09 語 (調整後 3.11 語)を示す *sepe* タイプは先行詞と関係代名詞の間に複数の語が入りやすいことがわかる。関係詞代名詞という形で与える情報が先行詞を限定するものであれ、補足的に説明するものであれ、先行詞を提示してすぐに情報が提示される場合に *pe* タイプがよく使用され、先行詞を提示してから一呼吸おいて情報が追加される場合には *sepe* タイプが使用されやすいことが明らかとなった。

4. 曖昧な用例の検討

ここまでの調査結果をふまえて、*sepe* タイプとすべきか*(se)pe* タイプとすべきか曖昧な用例について検討したい。先述の用例(5)に加えて、検討すべき用例を下記に 2 つ挙げる。

- (8) *Him ða ondsvarode ælmihti God,*
him then answered | almighty God.NOM.M
*swa þæt ne wiste, se ðe þæs words bad*¹²,
as though not knew | **who.REL.NOM.M** the.GEN.N word.GEN.N waited-for

¹² 動詞 *bad* < *bidan* は目的語に属格をとる (Bosworth 2014a; Brooks 1961: 133)。

hwæt se manna wæs meðelhegendra,

what the.noom.m man.nom.m was | holding-speech

þe he þær on waroðe wið þingode:

who.REL he there on shore.DAT.M | with made-a-speech

「時にその言葉を待ち受けていた全能の神は彼に答えた、そこ海岸で語り合っている相手がいかなる言葉を吐く人間なのかまるで念頭にないかのよう
に」

(*And* 260-263)¹³

(9) *He þeodum sceal*

| he people.DAT.PL shall

racian mid rihte, se ðe rodor ahof

rule with right.DAT.N | **who.REL.NOM.M** firmament.ACC.M set-up

ond gefæstnode folmum sinum,

and established | hands.DAT.PL his

worhte ond wreðede, wuldras fylde

created and maintained | glory.GEN.N filled

beorhtne boldwelan,

bright glorious-dwelling.ACC.M

「二つの手で天を高い所におき、それを造りそれを創めそれを保ち、美麗なるエデンの園を誉れもって満たされた方、その方は人々を正しく統治される。」

(*And* 520b-524a)

¹³ *And* 261 行については、*ne wiste* の主語を神とするか *Andreas* とするかで解釈が分かれている。この場面は船頭の姿をした神とそれに気づいていない *Andreas* の会話が描かれる。Brooks は場面の状況から ‘So that he (Andrew) who awaited His answer did not know who it was with whom he was conversing there on the shore’ と解釈すべきとしている (1961: 71)。一方、Bradley (1995) では、 ‘Almighty God then answered him in such a way that the one who awaited the reply did not realize what man among eloquent men this was to whom talked there on the shore’ と訳され、Krapp は、*swa þæt ne wiste* を ‘As though he (God) did not know’ (1932: 107) と解釈している。

ここまでの調査では、用例(5)は *God* ‘God’を、用例(8)は *æelmihti God* ‘almighty God’を、用例(9)は *he* ‘he’をそれぞれ先行詞とする *sepe* タイプの関係代名として分類してきた。このとき用例(5)(8)の先行詞は唯一無二の神であり、先行詞が提示された時点で識別可能であることは明らかだが、用例(9)の *he* も、創造主について語る文脈で使用されており前方照応的に指示対象を特定することができる。つまり、上記用例において関係代名詞は、指示対象を限定させる働きではなく、補足説明または言い換え表現として機能していると考えられる。

本論では(*se*)*pe* タイプを「主節に先行詞になり得るものがなく、かつ *se* が主節の要求する格を示す」ものと定義した。用例(5)(8)(9)は、主節に先行詞になり得るものがあるという点でこの定義には当てはまらない一方で、*se* が主節の要求する格を示すという点では合致している。また、(*se*)*pe* タイプは主に生物を表す際に用いる傾向が示されたが、上記 3 例とも生物を表す表現でありこの点に関しても(*se*)*pe* タイプの傾向に沿う表現であるといえる。

では、この分類が曖昧な表現について、本論における調査項目 3 点の結果と照らし合わせて検討していく。まず①先行詞の有生性に関する調査では、先行詞が生物である場合に *se* タイプと *sepe* タイプの頻度が高くなることが分かった。加えて、先行詞単体ではなく関係代名詞を用いた表現全体で意味のまとまりをみたときに、*se* タイプにおいては神を表す表現が 4 例、*Andreas* を表す表現が 3 例あり、物語の中で際立つ存在に対して *se* タイプがよく使用されていることを確認した。一方、*sepe* タイプについては、神を表す表現が 4 例あるものの、このうち 3 例が上記で提示した曖昧と考えられる用例で、かつ *Andreas* を表す表現はみられなかった。ここから考えられるのは、*sepe* タイプが特に神を表現する際に選ばれやすいという可能性、もしくはそもそも *sepe* タイプではなく(*se*)*pe* タイプに分類すべきであったという可能性である。後者であれば、もともと生物を表す 16 例のうち 4 例が神を表す表現である(*se*)*pe* タイプに上記 3 例が追加されることになり、(*se*)*pe* タイプの傾向を強化させることになる。

次に②先行詞の識別可能性に関する調査結果について、先行詞が

提示された時点で特定可能である場合 (レベル I)に、*se* タイプと *seþe* タイプが同程度選ばれやすいことが明らかとなった。*Se* タイプは、指示詞 *se* なのか関係代名詞 *se* なのか判断が難しい場合があるとされている (Mitchell 1985: §2105; Traugott 1992: 226)が、これは、関係代名詞として解釈され得る統語環境においても、*se* には代名詞としての性質が残っていることを示唆している。*Se* タイプが識別可能性の低い先行詞で頻度が高くなると同時に、特定が可能な先行詞に対しても使用が見られるのはこの性質によると考えられる。同様に、*seþe* タイプが識別可能性の高い先行詞と共起する場合、*se* の要素には代名詞としての性質が期待できる。しかし、識別可能性の高い先行詞であればすべて(*se*)*þe* タイプに解釈可能であるというわけではない。以下は、神を指す特定可能な先行詞に対して *seþe* タイプが使用されている用例である。

(10) *synnige* *ne mihton*

| (the) sinful.NOM.PL not was-able-to

oncnawan þæt *cynebearn,* *se ðe* *acenned wearð*

recognize the.ACC.N royal-child.ACC.N | **who.REL.NOM.M** born was

to hleo *ond* *to hroðre* *hæleða* *cynne,*

as protector.DAT.M and as joy.DAT.N | of-men.GEN.PL race.DAT.N

eallum eorðwarum.

all earth-dwellers.DAT.PL

「総ての地上に住む者、人々の族を保護し慰めるために生まれてきた王である
み子を認めることは罪ふかい者たちにはできなかった。」

(*And* 565b-568)

用例(10)では、先行詞 *þæt cynebearn* ‘the royal child’ (中性・単数・対格) に対して、関係代名詞 *se ðe* (男性・単数・主格) が使用されており、関係代名詞は主節ではなく関係詞節が要求する格を示している。この場合は用例(5)(8)(9)とは異なり、*se* は主節先行詞の同格表現とは言えず、関係代名詞の構成要素とみなされる。

用例(10)とは対照的に、用例(3)のような関係代名詞が主節の要求する

格を示している一方で、先行詞の識別可能性が低い用例もある。この場合、関係代名詞は先行詞を限定する働きをしているため、先行詞単独で持つ意味内容と関係代名詞全体が持つそれは「言い換え」といえるような等価関係にない。よって、先行詞の同格表現としての(*se*)*pe* タイプとみなされるには、第一に主節の要求する格を示すこと、第二に先行詞が単独で識別可能であることが必要であるといえる。

最後に③先行詞と関係代名詞の距離について、先行詞と関係代名詞の間に複数の語が入る場合には *sepe* タイプが選択されやすいことが示された。*(se)pe* タイプと解釈できる曖昧な用例を除外したとしても、*sepe* タイプの先行詞と関係代名詞の距離は平均 2.78 語 (調整後 2.67 語)あり、他のタイプと比較して先行詞と関係代名詞の間に距離がある傾向には変わらない。しかし興味深いことに、先行詞の同格表現としての(*se*)*pe* タイプとはみなされなかった用例(10)では、*sepe* タイプとしては珍しく先行詞と関係代名詞が隣接している。先行詞と関係代名詞の距離は、*se* が文の中でどのように機能するかに関係する項目と思われるが、残念ながら本調査で観察された *sepe* タイプ 11 例から結論づけることは難しい。

以上、曖昧な用例について本調査の結果と照らし合わせたところ、*Andreas* においても条件がそろえば *sepe* タイプを(*se*)*pe* タイプと解釈することが可能な用例があること、そしてそのように解釈しても関係代名詞の使用に関する全体の傾向に大きな矛盾を生まないことが確認できた。

5. おわりに

本論では、*Andreas* における関係代名詞の全数調査を通して先行詞と関係代名詞の選択の関係を記述し、特に複合型の *sepe* タイプの曖昧な用例について検討してきた。用例数が限られている本研究では結論を断定することはできないが、古英語期の韻文作品の一つである *Andreas* においては、主節に明示的な先行詞が存在する場合でも、その他の環境が整えば(*se*)*pe* タイプと解釈できる可能性があるといえそうだ。

Troup (2010)がこのような曖昧な用例について指摘した *Beowulf* と本論で扱った *Andreas* は韻文作品であるという点で共通している。書き言葉として目で楽しむ読者の他に、語られたものを耳で楽しむ聴衆がいたこと

が想定される。書き残された写本と実際に口頭でなされた語りがどこまで同一であったかはわからないが、先行詞が提示された後に複数の語が挟まる場合、後置修飾として離れた位置から関係詞節が始まったというよりも、(se)þe タイプとして指示対象が再度提示されたのだと理解されやすかったのではないだろうか。

今後は、関係詞節によってどのような情報が追加されたか、つまり現代英語では制限用法と非制限用法の違いで分類される観点について検討することで、聴衆や読者への情報提示の仕方についての理解が深まることが期待できる。加えて、この韻文作品を特徴付けている頭韻との関係にも目を向けることで、作家の語りの技法という観点からも調査を進めていきたい。

参考文献

- Bosworth, Joseph. 2014a. BÍÐAN. In T. Northcote Toller, C. Sean, & O. Tichy (eds.), *An Anglo-Saxon Dictionary Online*. Prague: Faculty of Arts, Charles University. <https://bosworthtoller.com/4227>
- . 2014b. blinnan. In T. Northcote Toller, C. Sean, & O. Tichy (eds.), *An Anglo-Saxon Dictionary Online*. Prague: Faculty of Arts, Charles University. <https://bosworthtoller.com/40580>
- Bradley, S. A. J. (ed.). 1995. *Anglo-Saxon Poetry*. Everyman. (ebook-Kindle)
- Breban, Tine. 2012. Functional Shifts and the Development of English Determiners. In Anneli Meurman-Solin, et al. (eds.), *Information Structure and Syntactic Change in the History of English*, ch. 12, 271-300, New York: Oxford University Press.
- Brooks, Kenneth R. (ed.). 1961. *Andreas and the Fates of the Apostles*. New York: Oxford University Press.
- Epstein, Richard. 2011. The Distal Demonstrative as Discourse Marker in *Beowulf*. *English Language and Linguistics* 15.1: 113-135.
- Krapp, George P. 1932. *The Vercelli Book*. New York: Columbia University Press.
- Mitchell, Bruce. 1963. Adjective Clauses in Old English Poetry. *Anglia* 81: 298-322.
- . 1985. *Old English Syntax*. Oxford: Clarendon Press.

- Montgomery, Michael. 1989. The Standardization of English Relative Clauses. In John H. Fisher & Joseph B. Trahern (eds.), *Standardizing English: Essays in the History of Language Change, in Honor of John Hurt Fisher*, 113-138, Knoxville: University of Tennessee Press.
- North, Richard & Michael D. J. Bintley. 2019. *Andreas: An Edition*. Liverpool: Liverpool University Press.
- Sánchez Argüelles, Gerardo. 2021. The Status of Compound Relatives in the Northumbrian Old English Gloss to the Rushworth Gospels. *English Studies* 102(5): 511-532.
- Suárez-Gómez, Cristina. 2009. On the Syntactic Differences between OE Dialects: Evidence from the Gospels. *English Language and Linguistics* 13.1: 57-75.
- Sundquist, John D. 2002. Relative Clause Variation and the Unity of *Beowulf*. *Journal of Germanic Linguistics* 14.3: 243-269.
- Traugott, Elizabeth C. 1992. Syntax. In Richard M. Hogg (ed.), *The Cambridge History of the English Language, volume 1: The Beginnings to 1066*, 168-289, Cambridge: Cambridge University Press.
- Troup, Andrew C. 1992. *The Old English Relative Clause: Ambiguity in Context*, ProQuest Dissertations Publishing.
- . 2010. *The Relative Clause in Old English: An Analysis of Syntactic and Stylistic Ambiguity*, Lewiston: Edwin Mellen Press.
- 井田琇穂. 1993a. 「古英詩 *Andreas* における関係代名詞について」. 『同志社大学英語英文学研究』 59: 67-86.
- . 1993b. 「古英詩 *Andreas* における関係詞節の格決定について」. 『同志社大学英語英文学研究』 60-61: 88-104.
- 羽染竹一. 1985. 『古英詩大観：頭韻詩の手法による』 原書房.

補遺

Andreas における関係代名詞の分布

形式	行番号
<i>pe</i> タイプ	101, 164, 263, 799, 815, 945, 1318, 1440, 1486, 1615
<i>(se)pe</i> タイプ	130, 161, 254, 282, 314, 344, 379, 519, 747, 886, 890, 974, 1154, 1164, 1194, 1266, 1386, 1479
<i>se</i> タイプ	12, 35, 605, 625, 752, 816, 1056, 1105, 1175, 1198, 1199, 1370, 1377, 1541, 1604, 1624
<i>sepe</i> タイプ	28, 261, 521, 535, 566, 579, 600, 638, 909, 980, 1152